

平成 22 年 6 月 14 日現在

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2007～2009

課題番号：19320064

研究課題名 (和文) 中国語と日本語の対照に基づく事象表現の総合的研究

研究課題名 (英文) A comprehensive study of event expressions in terms of the comparison between Chinese and Japanese

研究代表者

沈 力 (SHEN LI)

同志社大学・文化情報学部・教授

研究者番号：90288605

研究成果の概要 (和文)：本研究は当初の企画どおり、次のような成果が挙げられている。(1) 事象記述については新しい言語事実の発見、(2) 理論構築について、とくに静的事象の理論化や日中使役表現の共通性の発見、(3) 心理実験の実施及びその成果が公表。(4) 応用研究の成果として、コーパスによる言語研究の進展とともに、中国における 40 方言の音声データ作成及びデジタル化完成、(5) 科研を中心とする研究会は 12 回実施、(6) 研究成果の公表や国際交流の促進のための国際フォーラムは 2 回開催、(7) 事象関係の論文集は 1 冊出版済み、さらに 4 冊を企画中である。詳細は下記参照されたい。

最後に、この科研の成果として中国の言語学関係者と日本の言語学関係者の交流が盛んになり、共同で更なる重要なプロジェクトを作ることにつながるようになったと言える。

研究成果の概要 (英文)：This research has achieved the following important results, accord to our original research objectives: (1) we discovered new linguistic facts concerning the description of event expressions, (2) we constructed a theory of stative events and the comparative syntax between Chinese and Japanese causatives, (3) we carried out some psychological experiments about event expressions and published some papers, (4) We applied our theory to the development of the corpus study of events and created the data base system of 40 Chinese dialects, (5) we held research meetings about event expressions twelve times, (6) we held international conferences twice in order to publish the conference proceedings and to facilitate the academic interactions among linguists in China and Japan, (7) we already published one proceedings of the international conference held in China and we are now planning to publish four volumes of books concerning the descriptive and theoretical studies of the structure and interpretation of events. For more detailed information, see below.

Finally, on the basis of the above achievements, we are convinced that we can promote exchange of various ideas with linguists in China, which enables us to start a new research project together.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
2008年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2009年度	1,800,000	540,000	2,340,000
年度			
年度			
総計	9,500,000	2,850,000	12,350,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：統語論、日中対照言語研究

1. 研究開始当初の背景

日本国内において、中国語と日本語との対照研究の観点から事象表現を扱った研究には、事象タイプやアスペクトの記述が多く見られるが、事象表現を体系的に説明しようとする試みはなされていない。一方国外においては、Huang (1988)を始め、それぞれの言語における事象表現を理論的観点から扱った優れた研究が存在する。しかし、両言語の対照を試みた研究はほとんどない。対照研究の成果を外国語としての中国語と日本語の言語教育において取り入れる試みは、記述的研究においてはみられるが、本研究のように、これまで結びつけにくいとされてきた理論的研究の成果を、記述的研究と実験的な心理言語学・第二言語習得研究を介在させることで、積極的に応用しようとする試みはまだほとんどなされていない。

2. 研究の目的

人間がある出来事を言語化する際に、時間の流れの中でその出来事をどのように捉えているのか、出来事のどの側面が言語化されるのが重要な問題となる。捉えようとする出来事自体は同じであっても、その表現方法が言語ごとに異なる時、言語の比較・対照研究における興味深い課題が生じる。本研究は中国語と日本語の対照を通して、(1) 事象表現が言語間でどのように異なるのか、それがテンス及びアスペクトマーカの働きや複合述語の形成などの言語現象にどんな影響を与えるのかという対照言語学の問題、(2) 事象表現をめぐる言語間の相違を説明するパラメータと、相違の背後にある普遍的メカニズムを解明するという理論言語学の問題、(3) 事象表現の相違が、両言語における文の理解や産出の過程にどのような影響を及ぼすかという心理言語学の問題に取り組む。そして理論的研究の成果を言語教育へ応用するために、(4) 外国語としての両言語の学習に事象表現の相違が及ぼす影響に関する第二言語習得研究および、(5) 記述研究に基づくコーパス・データベースの整備とそれに基づく教材作成を実施する。

3. 研究の方法

(1) 研究体制形成：沈力代表統括

記述研究班：村木、定延、ラマール、楊

理論研究班：影山、星、酒井、酒井

実験研究班：酒井、星

応用研究班：田野村、張、星

各班の連携関係は次のとおりである

理論研究班→〈方法提供〉→記述研究

記述研究班→〈資料検証〉→実験研究

実験研究班→〈実験検証〉→理論研究

応用研究班は各班の研究成果を生かしながら教育現場に還元できるようなデータベースを作成する。

(2) データ収集及びコーパス・データベース作成の準備

アスペクト・テンスを中心に事象表現に関わるデータ収集をおこなう。ラマール、沈は中国北方方言におけるデータを収集する。これらの地域の方言を完全に話すことができる中国語方言話者が日本においては限られているため、中国でインタビュー調査をおこなう計画である。星は京都方言および琉球方言の言語データを収集し、必要に応じて現地でのインタビュー調査をおこなう。収集されたデータに基づいてコーパス及びデータベース作成の準備をおこなう。コーパスは田野村を中心に星と沈が、データベースに関しては、張がそれぞれ担当する。

(3) スペクト・テンスにおける日本語・中国語の記述的・理論的研究

事象表現における中心的な概念は出来事の変化であり、その変化の捉え方が問題になる。それを解明する1つの手がかりとして、アスペクト・テンスマーカがどのように事象変化の様々な側面を表しているのか探求する。中国語と日本語の標準語及び方言の事象表現を比較・対照することによって類似点・相違点を明らかにし、その背後にある事象のタイプおよび構造を明示する。記述研究に関しては、定延が「日本語における話し言葉のアスペクト研究」を、ラマールが「中国北方方言におけるアスペクトの記述」を、楊が「アスペクトと関わる副詞的表現の日中対照研究」を、森山が「日本語の事象タイプの研究」を、村木が「複文に関する事象タイプの研究」をそれぞれ担当する。理論研究に関しては、機能範疇である light verb (軽動詞) の存在が様々な統語現象から実証されているが、アスペクト・テンスを含む統語構造とどのように関わり、どの意味解釈と結びつくのかははっきりとはわかっていない。この問題を解決するため、「事象表現における機能範疇の果たす役割」を中心課題として研究を進める。影山が「アスペクトシステムと語彙概念構造に関する理論的研究」を、酒井が「日英中のアスペクトに関する事象構造の研究」を、沈が「中国晋方言におけるアスペクトの事象構造と統語構造」を、星が「京都方言と琉球方言における light verb の比較統語研究」をそれぞれ担当する。

(4) 心理言語学実験による調査

中国語と日本語の事象表現の相違が、それぞれの母語話者の文処理過程にどのような影響を与えているか、文の読み時間を計測する心理言語学実験によって調査する。中国語と日本語では動詞が事象の限界点をどのように表現するかという点で異なっており、日本語では「殺す」のような他動詞は単独で出来事が限界点(対象の状態が変化)まで到達したことを表すが、中国語では対応する動詞「殺」だけでは変化の意味を表すことができず、「殺死」という複合動詞で表現しなければならない。この実験では、文中に「1時間の間」「1時間で」など限界点の有無を示す時間副詞が現れたとき、後続する動詞の語彙的アスペクトに応じて読み時間がどのように変化するか計測する。計測結果を通して、言語間の事象表現の相違が、実時間で文を理解する過程にどのような影響を与えているか明らかにする。予測として、日本語の動詞は事象に限界点があるか否かを語彙的情報として含んでいるので、副詞による動詞の読み時間への影響が中国語より大きいはずである。

(5) 定例研究会で共同・連携研究者間の学術交流を図る。

平成16年8月に日本語と中国語の統語構造と意味構造の相関に関する理論構築を目的とする「中日理論言語学研究会」(代表:沈、発起人:木村英樹(東京大学)、平田昌司(京都大学)、益岡隆志(神戸市外国語大学)、李長波(京都大学)、井上優(国立国語研究所)、于康(関西学院大学)、ラマール、田野村、森山、影山、定延、張、楊)が組織され、以来平成18年10月までに計8回研究発表会が行われている。本研究では、この定例研究会を本研究の研究構想推進の場と位置づけ、活用する。「日本語と中国語における事象表現研究」をテーマとし、本研究の代表者・分担者が定期的に会談し、各自の研究の進捗状況を報告する場となる。国内の若手研究者を発表者として招聘し、情報交換をおこなう場としても機能することができる。

(6) 国際シンポジウム開催及び論文集の刊行

国際的なネットワークを立ち上げ、日本語と中国語の研究者に研究成果をリアルタイムに共有できるようにすることは本研究の一つの特色であるが、その契機として平成19年9月に北京大学の協力を得て、「中日理論言語学フォーラム」と題する国際シンポジウムを開催し、発表論文を中心とした論文集を刊行する。これによって中国全土の日本語・中国語研究者が集い、日中間の国際的なネットワークの基盤を構築する第一歩となる。

4. 研究成果

本研究の目的を100%達成したと言える。一

方、今後の課題として、データベース構築や教育への応用を今後一層発展させる余地が残っている。

(1) 記述的研究成果

事象表現が言語間でどのように異なるのか、それがテンス及びアスペクトマーカの働きや複合述語の形成などの言語現象にどんな影響を与えるのかという対照言語学的問題、これらの問題について沈力は方言関係としては「用GIS跟踪霍州話構形法的衰退軌跡—以代詞的派生機製為中心—(GISによる霍州方言の形態法衰退の軌跡を探求—代名詞派生メカニズムを中心に)」、「用GIS分析霍州方言元音谐和律的衰退現象(GISに基づく霍州方言における母音調和の衰退現象の分析)」の成果を上げているばかりではなく、事象記述として「漢語蒙受句的語義結構」や「中国語の名量詞後置文の分析」などの理論的な記述成果も発表している。村木新次郎は「日本語の節の類型」や「日本語の形容詞—その機能と範囲」などの成果を上げ、定延利之は『煩惱の文法』などの著書で日本語における静的事象に関する新しい事実を発掘して注目されている。現実の会話の文法は、これまでの書きことば中心の文法とはどう違っているか、という観点から、従来の文法研究と会話研究の接合点を明らかにした。特に中心的に論じたのは、体験型のデキゴト表現の統語的、音調的特徴であり、その中で、話し手の人物像が、意外なほど文法性判断に関わっているということが明らかになった。具体例を挙げれば、現在目の前にモノを発見して「あ、手帳がある」ではなく、「あ、手帳あった」などと体験的な発話に及ぶ場合に現れる、いわゆる発見の「た」が、事前の予期(このあたりに手帳があるのではないかという気持ち)を必要とするかどうか、話し手の人物像に関わることを示した。Christine LAMARREは「西北方言的慣常性行為標記“NE”」、「中国語の位置変化文とヴォイス」などの記述的な成果を上げている。楊凱榮は「中日受益表現と所有構造の対照研究」で、日中間の受益表現の差異を綿密に記述している。

(2) 理論的研究成果

事象表現をめぐる言語間の相違を説明するパラメータと、相違の背後にある普遍的メカニズムを解明するという理論言語学的問題、これらの問題について、沈力は「中国語と日本語の結構事象は如何に捉えられているのか」、影山太郎は「出来事の世界とモノの世界」はどのようにとらえているのか、酒井弘は「数量表現における事象限定と動詞連続の構造」、星英仁は「間接受身文における中日比較統語論研究」というテーマでそれぞれ新しい研究成果をあげ、国際学会で公表されている。

(3) 心理実験の実施とその成果

研究分担者酒井弘は、事象把握と数量表現、敬語文や形式名詞などを対象として日本語統語論・意味論研究を実施した。さらに、事象理解の認知過程や、第二言語としての日本語学習者のアスペクト情報処理に関する心理言語学実験を実施した。その成果は学術雑誌や論文集に掲載されている。

(4) 応用的研究成果

コーパスやデータベース構築による応用的研究について、田野村忠温は「[特集「日本語コーパス」] コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発」や「電子資料と日本語研究——昨今の動向と事例研究——」などでコーパス構築とその検索による言語研究の有用性を論じている。さらに、張勤は「中日事象表現データベースの構築について」で、この三年間のデータベースの作成成果を発表している。最後に、侯精一（中国言語学会会長）は中国の40の音声方言をデータベース化しているが、さらに、本科研はそれらの貴重な音声データをデジタル化することを成し遂げた。

(5) 各研究班の学术交流促進の場

中日理論言語学研究会を12回開催し、ゲストスピーカーを交えて研究分担者、連携研究者、研究協力者同士は学术交流を行うことができたこと、さらに、本研究会に若手研究者が多数参加していることから、若手研究者育成に重要な役割を果たしていると考えられる。本研究会の第九回～第二十一回までの発表者リストは次のとおりである。

第九回(2007/4/22) :

岸本秀樹、由本陽子、酒井弘、沈力

第十回(2007/7/29) :

村木新次郎、史有為、徐雨 fen

第十一回(2007/10/14) :

意西微薩、阿錯、金善美、野田尚史、張麟声

第十二回(2008/1/13)

彭広陸、黄ワンテー、木村英樹

第十三回(2008/4/27)

星英仁、劉勳寧、前田広幸

第十四回(2008/7/27)

尾上圭介、張勤、李長波

第十五回(2008/10/5)

加藤重宏、名嶋義直、王占華

第十六回(2009/1/11)

杉村文博、高橋康徳、張黎

第十七回(2009/4/19)

任鷹、塚本秀樹、浦木貴和

第十八回(2009/7/26)

2009 中日理論言語学国際フォーラム

と合同開催（詳細は下記国際会議参照）

第十九回(2009/10/18)

斉木美知世・鷲尾隆一、下地早智子、巖[香復]

第二十回(2010/1/31)

侯精一、王陪淳、王軼群

第二十一回(2010/4/18)

山崎直樹、黄菲菲、井上優

(6) 研究成果の公開と国際交流

本研究計画に参加しているメンバーを中心に、中国の研究者との交流を図るためにまた、本研究の成果を国際的にアピールするために国際会議を2回開催した。

第一回目の国際会議：「2007 中日理論言語学研究国際フォーラム」

開催地：北京大学

開催時：2007年9月1日、2日

主催者：北京大学外国語学院及び中日理論言語学研究会

共催：日本国際交流基金北京事務所、日本学術振興会科学研究費（基盤研究A）「データ科学の新領域の開拓—文化財データ解析—」、日本学術振興会科学研究費（基盤研究B）「中国語と日本語の対照に基づく事象表現の総合的研究」

後援：北京大学出版社、高等教育出版社、外語教学与研究出版社・商務印書館、カシオ株式会社や多くの出版社の協賛

報告：1日目の午前には影山太郎（関西学院大学教授）氏、沈家せん氏（中国社会科学院言語学研究所所長）、三原健一氏（大阪大学）による基調講演がおこなわれた。影山氏は「出来事の世界とモノの世界—事象叙述と属性叙述—」、沈家せん氏は「On Sentence Formation by Compounding in Chinese」、三原氏は「いわゆるナ形容詞の結果述語を巡って」というタイトルでそれぞれ講演をおこなった。午後には「ことばは世界をどう捉えるか—事象表現の対照を通して—」と題したパネルディスカッションにおいて、岸本秀樹氏（「部分達成を表す事象構造について」）、由本陽子氏（「複雑述語の形成に伴う事象構造の合成と項の実現」）、酒井弘氏（「数量表現による事象限定と動詞連続構造」）、胡建華氏（「Exhaustively in Quantification」）、沈力（「中国語の結果構文と事象構造」）がそれぞれ研究発表をおこなった。パネルディスカッションでは会場から多くの質問やコメントが続出し、盛り上がりのある議論となった。

2日目は午前と午後にわたり、分科会が開催され、ワークショップ「新漢語の創出」を含む64の研究発表がおこなわれた。「日本語学」、「中国語学」、「中日対照研究」、「言語教育」のセクションに分かれ、活発な意見交換がおこなわれた。両日ともに参加者と研究発表者は100名を越え、専門領域を異にする言語学者の交流が可能になった。中国語あるいは日本語を主な対象とする研究者、中日両言語の比較・対照をおこなう研究者、あるいは、方法論として言語現象の記述や新たな言語事実の発掘を中心とする研究者、理論中心の

研究者などが一同に会し、中国語・日本語に対する様々なアプローチの妥当性が議論され、中日両言語に関心・興味を持つ研究者にとっては有意義な学术交流の場となった。今後は、中日理論言語学研究のさらなる発展・進化を目指すため、このような交流をより充実させていくことが期待される場所である。

第二回目の国際会議：「2009 中日理論言語学研究国際フォーラム」

開催地：同志社大学寒梅館

開催時：2009年7月26日

主催者：日本学術振興会科学研究費補助金による基盤研究(B)『中国語と日本語の対照に基づく事象表現の総合的研究』(課題番号:19320064, 研究代表者:沈力)

共催：同志社大学国際連携推進機構、北京大学外国語学院日本語文化学部及び中日理論言語学研究会

報告：本国際フォーラムは午前部と午後部に分けておこなわれました。午前には、『事象表現に関する日中対照研究の展望』と題したパネルディスカッションにおいて、定延利之氏(静的な事象表現に関する日中対照研究の展望～特に体験表現をめぐって～)、彭広陸氏(動的な事象表現に関する日中対照研究の展望～特に移動表現をめぐって～)、沈力氏(事象構造に関する日中対照研究の展望～特に使役表現をめぐって～)がそれぞれ研究発表をおこないました。パネリストの発表に引き続き、コメンテーターの益岡隆志氏と杉村博文氏から有益なコメントを頂き、さらにフロアからも建設的な質問が数多くなされ、熱烈的な討議が展開されました。午後の研究分科会では、20名の研究発表がおこなわれ、活発な意見交換が繰り広げられました。発表概要は中日理論言語学研究会のホームページの「18回研究例会」参照していただければ幸いです。URL: <http://cjt1.doshisha.ac.jp/>

(7) 論文集出版
科研費の成果は当然一般公開しなければならない。まず、一部の研究成果は2009年6月に沈力・趙華敏(編)『華日理論言語学研究』(華苑出版社)に収め出版している。さらに、平成22年度に、本科研(19-21)の三年間の研究成果をまとめて影山太郎・沈力(編)「中日理論言語学論集シリーズ(くろしお出版)」を出版する計画を立てている。それぞれ『複雑述語と事象構造』、『統語構造と意味解釈』、『統語範疇と語彙分類』、『事象タイプの記述研究』である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計30件)

① 沈力. 2009. 「漢語蒙受句的語義結構」. 『中

国語文』No. 1, 45-53. 査読有

② 沈力・馮良珍・津村臣宏. 2009. 「用GIS跟踪霍州話構形法的衰退軌跡—以代詞的派生機製為中心—(GISによる霍州方言の形態法衰退の軌跡を探索—代名詞派生メカニズムを中心に)」『東方語言学』No. 5, 104-122. 査読有

③ 影山太郎. 2009. 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136号, 1-34. 査読有

④ 村木新次郎. 2009. 「日本語の形容詞—その機能と範囲」『国文学 解釈と鑑賞』No. 74-7, 6-19. 査読無

⑤ 田野村忠温. 2009. 「[特集「日本語コーパス」] コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発」『人工知能学会誌』No. 24.5, 647-655. 査読有.

⑥ 田野村忠温. 2009. 「日本語研究の観点からのサーチエンジンの評価・続—検索ヒット件数の時間変動のその後とWeb文書量の推計の修正—」『計量国語学』No. 26.8, 290-294. 査読有.

⑦ Sakai, H., Ivana, A, 2009. Rethinking Functional Parametrization: A View from Honorification in the Nominal Domain in Japanese, English Linguistics, 26:2, 437-459, [査読有]

⑧ Christine LAMARRE. 2007. 「從趨向範疇的方言表述看“書面漢語中的不同層次”的判定」『中国語学』No. 254, 51-73. 査読有

⑨ 定延利之. 2007. 話し手は言語で感情・評価・態度を表して目的を達するか?—日常の音声コミュニケーションから見えてくること—『自然言語処理』第14巻第3号, 言語処理学会, 査読有, pp. 3-15.

⑩ 楊凱榮. 2007. 「表全称句式的中日対比研究」『日語研究』No. 5, 商務印書館 p39-56. 査読有.

[学会発表] (計40件)

① 酒井弘. What We Cannot Expect from Experimental Syntax 日本英語学会第27回全国大会 Symposium “Experimental Syntax: What We Can Expect, and What We Cannot”. 2009年11月15日. 大阪大学.

② Tanomura, Tadaharu. “Corpus-Based Analysis of Some Time-Related Aspects of Contemporary Japanese” CLAVIER 09, University of Modena and Reggio Emilia, Italy, 2009年11月5日

③ 村木新次郎. 「日本語文法の主流と傍流—単語と単語の分類(品詞)の問題を中心に—」(招待講演), 日本語学会, 2009年10月31日. 島根県民会館.

④ 沈力. 「事象構造に関する日中対照研究の展望—とくに使役表現をめぐって」2009中日理論言語学国際フォーラム、パネルディスカッション. 同志社大学寒梅館にて 2009年7月26日

⑤ 定延利之. 「静的な事象表現に関する日中対照研究の展望—とくに体験表現をめぐって」20

09 中日理論言語学国際フォーラム、パネルディスカッション。同志社大学寒梅館にて 2009 年7月26日

⑥張勤、星英仁、沈力、金明哲。「中日事象表現データベースの構築について」2009 中日理論言語学国際フォーラム。同志社大学寒梅館にて 2009年7月26日

⑦星英仁。「間接受身における事象表現の統語構造とその解釈」2009 中日理論言語学国際フォーラム。同志社大学寒梅館にて 2009 年 7 月 26 日

⑧影山太郎。「言語の構造制約と叙述機能」日本言語学会 136 回大会会長就任講演。2009 年 6 月 21 日。神田外語大学。

⑨Christine LAMARRE。「西北方言的慣常性行為標記“NE”」第 3 届西北方言及び民俗国際学術研究討論会。2008 年 6 月 14 日、中国蘭州

⑩楊凱榮。「中日副詞対比研究一以幾個常用頻率副詞為例一」大東文化大学外国語学部 35 周年記念講演。2007 年 12 月 1 日、大東文化大学。

⑪沈力。「ことばは世界をどう捉えるか：中国語の結果構文と事象構造」2007 中日理論言語学フォーラム パネルディスカッション、2007 年 8 月 31 日-9 月 1 日、北京大学。

⑫影山太郎。「出来事の世界とモノの世界-事象叙述と属性叙述」(基調講演) 2007 中日理論言語学フォーラム、2007 年 8 月 31 日-9 月 1 日、北京大学。

[図書] (計 22 件)

①沈力・趙華敏。2009. 『漢日理論言語学研究』。学苑出版社。ページ数 404。北京

②沈力(由本陽子・岸本秀樹)。2009. 「中国語の名量詞後置文の分析」(『語彙の意味と文法』), pp. 373-394. ページ総数: 500. くろしお出版。東京。

③Taro, kageyama(Rochelle Lieber and Pavol Štekauer). 2009. “Isolate: Japanese, (The Oxford Handbook of Compounding),” pp. 512-526. Oxford: Oxford University Press.

④影山太郎(益岡隆志)。2008 「属性叙述と語形成」(『叙述類型論』) pp. 23-45 くろしお出版。東京。

⑤Christine LAMARRE(XU, Dan). 2008. The Linguistic Categorization of Deictic Direction in Chinese: With Reference to Japanese, (Space in Languages of China). ページ総数 200. Dordrecht: Springer.

⑥Christine LAMARRE (生越直樹・木村英樹・鷲尾龍一)。2008. 「中国語の位置変化文とヴォイス」(『ヴォイスの対象研究---東アジア諸語からの視点』)。ページ総数: 194. くろしお出版。東京

⑦田野村忠温(児玉一宏・小山哲春)。2008. 「複合辞の本性について---その構成と単位性---」(『言葉と認知のメカニズム山梨正明教授還暦記念論文集』) pp. 489

~497. ひつじ書房

⑧定延利之。2008. 『煩惱の文法-体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話』。筑摩書房、200 頁。

⑨木村英樹・楊凱榮(生越直樹・木村英樹・鷲尾龍一)。2008. 「授与と受動の構文ネットワーク-中国語授与動詞の文法化に関する方言比較文法試論-」(『ヴォイスの対照研究』)。くろしお出版。65-91 頁

⑩張勤。2007. 「ポライトネスの文法-人称的視点と要請言語行為の関わりから」(『南腔北調論集 中国文化の伝統と現代』) pp1007-1024, 東京: 東方書店。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

沈力 (SHEN LI)

同志社大学・文化情報学部・教授

研究者番号: 90288605

(2) 研究分担者

影山 太郎 (KAGEYAMA TARO)

国立国語研究所・所長

研究者番号: 80068288

村木 新次郎 (MURAKI SHINJIRO)

同志社女子大学・文芸学部・教授

研究者番号: 00000430

田野村 忠温 (TANOMURA TADAHARU)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号: 40207204

楊 凱榮 (YANG KAIRONG)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号: 00248543

Lamarre, Christine

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号: 30240394

酒井 弘 (SAKAI HIROMU)

広島大学・教育学研究科・准教授

研究者番号: 50274030

定延 利之 (SADANOBU TOSHIYUKI)

神戸大学・国際文化学術研究科・教授

研究者番号: 50235305

張 勤 (ZHANG QIN)

中京大学・国際教養学部・教授

研究者番号: 50298478

森山 卓郎 (MORIYAMA TAKURO)

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号: 80182278

星 英仁 (HOSHI HIDEHITO)

同志社大学・文化情報学部・准教授

研究者番号: 70340461

(3) 連携研究者 無し

研究協力者はつぎのとおりである。

伊藤さとみ (お茶の水女子大学)

于康 (関西学院大学)

李長波 (京都大学)

木村英樹 (東京大学)